

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

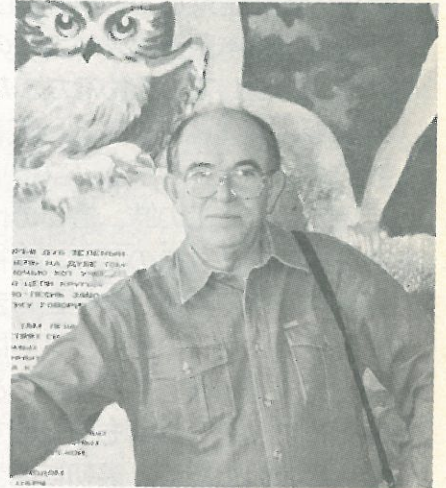
ポレーシエ

15年にわたる感謝の思い (連載 その1)

…ウクライナと日本の交流 15 周年を記念して…

「チェルノブイリの人質たち」基金代表
ヴラディーミル・キリチャンスキー

誰かが、助けの手を差し伸べれば、それに対して必ず感謝の気持ちが生じるものです。特に、その支援が非常に必要とされており、その支援によって、自分がなにか欠けたところのある人間なのではなく、社会の一員としてのまっとうな権利を持っているのだと感じられる時には、なおさらです。このような人たちが、わがジトーミル州にはとても多いのです。その理由を述べることにしましょう。



チェルノブイリ原発事故は、人々の日常の生活のリズムを、乱してしまいました。それは、地球規模の惨事だったのですから…。「津波」の影響が、すぐ目に見えて感じられるものだとすれば、「放射線」は、人々を徐々にむしばんでいきます。何年も、何十年もかけて…。ジトーミル州は、ウクライナの中でも最も汚染された州です。事実上、州民の 3 分の 1 が、なんらかの程度において、チェルノブイリ事故の影響をわが身に感じるようになりました。そして、1986 年 4 月 26 日から、私たちが遠ざかれば遠ざかるほど、チェルノブイリがより身に迫って感じられるようになるのです。医学的・社会的・精神的なチェルノブイリが…。(次ページへ続く)

<2005 年の 1 年間、85 号～90 号の 6 回にわたり、キリチャンスキーさんの連載を掲載します。>

NPO (特定非営利活動法人)

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

たとえ、国家予算のすべてをつぎ込んだとしても、自力でチェルノブイリ事故の影響を解消することは、ウクライナにはとうてい不可能です。ですから、外部からの支援は、ほんとうに不可欠のものです。それによって初めて、惨事の影響を抑えることができるのです。最近インド洋で起こった、地震と津波の犠牲者についての公式データが、20万人に上るとすれば、ジトーミル州では、チェルノブイリ事故後18年の間に、住民数が同じ人数だけ減っています。私たちは、常に恐怖におびえ、明日に対する信頼感を持ってないまま、ここに住んでいます。

チェルノブイリ事故が発生し、世界がそれについて知った時、支援の希望を表明した人たちはたくさんいました。しかし、時とともに実質上すべての支援はとだえてしまい、一回きりのものにとどまりました。残ったのは、日本からの支援だけでした。私たちは、これがなにか特別な現象だとは思っていません。日本自身が被爆国だと知っていますし、また一方では、日本の庶民の生活信条として、「自分より苦しい生活をしている人を支援する」ということがあるのですから。資本主義のオオカミの論理が、長年にわたってつちかわれてきた思いを、日本人の心から追い出してしまわなかったのは、うれしいことです。

日本が、具体的な姿をとって私たちの前に現れたのは、1990年8月に「チェルノブイリ救援・中部」の支援が始まった時でした。この時、最初の代表団が訪れ、最初の支援物資を届けてくれたのです。当初、日本側は、支援を要請する人はすべて支援しようとしていました。そのため、一度でも支援を受けた対象者のリストは、非常に長いものです。その頃、支援物資を持ち込むことは、現在に比べてずっと容易だったという事情もあります。

日本の友人たちに、最初に感謝の意を表明することになったのは、チェルノブイリ事故の結果最も多くの被害を受けた、ナロジチ地区の住民たちでした。それに続いて感謝の言葉を述べたのは、コーラステン地区病院、コーラステン汚染地域検診センター、ジトーミル州立成人病院、州立及び市立の小児病院の職員たちでした。それと同時に、日本人たちは、子だくさんの家庭の汚染地域からの移住にも、積極的に関わってくれました。日本から送られたカレンダー・文房具・ラジオなどは、ジトーミルで売られ、そのお金の移住者のための家が購入されました。オヴルチに住んでいたジャーナリスト、アナトーリイ・クリシの家族は、「チェルノブイリ救援・中部」に対する感謝の気持ちを、永遠に持ち続けるでしょう。彼らは、カレンダーの売り上げで購入された家に、住んでいるのですから。今、クリシ家には、新しい一員が加わっています。汚染されていない環境で生まれた息子です。

15年にわたる「チェルノブイリ救援・中部」の支援の規模を測ることは、一般の州民にはとうてい不可能です。それができるのは、支援を受け取りそれを配分している、「チェルノブイリの人質たち」基金だけです。私たちは、行われたあらゆる種類の支援に相当する、ほぼ正確な金額をお知らせすることができます。その額は、700万米ドル（約7億円）を超えるものです。私たちはもちろん、この支援をほんとうにありがたいものと思っています。しかしそれ以上に、皆さんの誠意・配慮・優しさに感謝しています。ですから、皆さんに申し上げたいのです。

「ドウモアリガトウ！」…と。（次号へ続く）



＜日本の NGO 初となったウクライナ訪問＞

2006スタディ・ツアー

今年もやります「ウクライナ講座」

昨年のウクライナ講座のテーマは「ボランティア養成」でした。チェルノブイリ原発事故からちょうど20周年を迎える来年(2006年)4月に、第4回目のスタディ・ツアーを計画しています。

そこで、今年のウクライナ講座のテーマを、

「2006・スタディ・ツアー

～“チェルノブイリ20周年メモリアル”に向けて～」

と題して、企画の段階から参加ボランティアを募集しながら、進めることにしました。

今、ウクライナは未曾有の経済成長を続け、民主化へも向かおうとしています。しかし、それは表向きの話。首都キエフからチェルノブイリの方角に足を運べば、閉ざされた大地・見捨てられた人々が存在するのです。20年経っても、チェルノブイリの悪夢から逃げ出せずに苦しんでいる人たち…。

被災者の立場にたった支援とは何か？ 被災者の自立は果たして可能なのか？ 多くの問題意識をもちながら、ツアー成功に向けていっしょに取り組みませんか。今年1年かけて、現地で行うイベントを含めた、ツアーの企画を練るためにも、ぜひウクライナ講座にご参加ください。

まずは現状把握。4月16日に、「19年目のチェルノブイリ—放射能汚染の現状」(講師：河田昌東氏)と題した講座を行います。今まで、放射能の恐ろしさに関心のなかった人にも、ぜひ聞いていただきたいと思います。

日時 4月16日(土) 午後1時30分～4時

*場所は、次号ポレーシェでお知らせいたします。

ボ ラ ン テ ィ ア 募 集

2005年 ウクライナ講座の予定

4月16日(土)「19年目のチェルノブイリ—放射能汚染の現状」(河田さん)

6月18日(土)「スタ・ツアー企画発表」参加者募集

8月20日(土)「スタ・ツアー準備企画—私の知っているウクライナ①」

10月15日(土)「スタ・ツアー準備企画—私の知っているウクライナ②」

12月17日(土)「スタ・ツアー準備企画—心をつなげよう(キルトの仕上げ)」

●その他、恒例の「ウクライナ料理教室」も企画します。お楽しみに！

「名古屋生活クラブ」の皆さん、ご協力に感謝します!!



皆さま、お久しぶりです。覚えておられるでしょうか、2年程前、研修生としてチェル救にお世話になった長町諭です。

あの当時は、河田さん・山盛さんを始め、スタッフの皆さんに、多々ご迷惑をおかけしながらも、暖かく育てていただきました。何もできませんでしたが、半年間、精一杯がんばったつもりです。その後私は、自分なりに模索しながら、もちろんチェル救にも関わらせていただきながら、進む方向を探していました。そんな中、またもや河田さんのお導きによって、現在の「名古屋生活ク

ラブ」という会社でお世話になることになりました。

「名古屋生活クラブ」は、無農薬の野菜や無添加の食品を配達している会社です。現代表の伊沢が、昔から河田さんと、「原発」や「フィリピンバナナ労働者の問題」「公害問題」などに取り組み、現在では「遺伝子組み換え問題」「学校給食問題」などでも、共に動いています。

ここで早一年過ぎ、なんとかチェル救に恩返しができないかと、今回の「名古屋生活クラブ・ミルクキャンペーン！」に至りました。結果から申しますと、なんとなんと、120,900円ものカンパをいただきました。昨年11月、会員の皆さんに、一枚のチラシを入れさせていただいただけなのです。現在、900人前後の会員さんがいらっしゃいますが、こんなにもたくさんカンパしていただけたとは、なんとも、皆さんの意識が高いことに感嘆してしまいました。

今回は、もちろん現実的なミルク購入資金なんですけど、チェルノブイリから世界に散らばった放射能は、18年経った現在、また今後も残り、確実に人々を死に追いやっていくという現実を、知っていただきたいという気持ちもあります。

50基以上の原発を抱える原発大国日本、特にこの地域では、浜岡原発付近を予想震源地とした「東海地震」が危ぶまれています。遠いチェルノブイリのことを想像するのは、なかなか難しいかもしれませんが、「実際に、私たち自身が、世界で最も放射能の危険にさらされている地域に住んでいる」といえると思います。分かりやすいのはイラク…劣化ウラン弾によってばら撒かれた放射能は、おびただしい数の奇形児・白血病などの病気を生み出しています。

自分たちの望む未来を、自ら声をあげ、自ら実行して、実現したいですね。

今回の反省点としては、皆さんに分かりやすいチラシの入れ方が、できなかったことです。見落としがちなことで、カンパできなかったという方が結構いらっしゃって、後で直接いただき、なんとも本当にご迷惑をおかけしました。でも皆さんの気持ちは、病院や孤児院で療養している子ども達に、しっかり届けます。

「来年はもっと分かりやすい形で…」などと、今から思っています。本当にどうもありがとうございました!

(長町 諭)



クリスマスカードが 無事 子ども達の手に!!

全国の皆さんに案内してから、毎日のようにぞくぞくと、カードや折り鶴が長野に届きました。手をかけて紙や布を貼り立体的に飛び出す物や、小さい子どもさんが作ったのかな?とか…。様々なカードや折り紙が届くと、「さすがすごい!」と思いました。長野は、今回が初めてなので、連絡の方法やお願いの仕方にも馴れてはいたが、カードを送ってくださった多くの方々には初めてではないので、お一人ずつ手紙やメモが入っていて、気持ちが伝わってきました。期間が短かったにもかかわらず、ほとんどが締切日までに届きました。それからが大忙しで、チェルノブイリに送る準備です。ちょっとさみしいものには色をつけたり、何も書いてないただの市販のカードには、言葉や絵を書き加えたり、ウクライナの言葉でできたゴム印をおしたり、中には、封筒のないものもあり、封筒を作ったりして入れました。当初報告したよりも、どんどん増えていきます。夜遅くなっても、「受け取った子ども達は、きっとうれしいだろうな」と思いながら、北信濃の仲間と応援の方と、2日間一生懸命にやりました。

最後に一枚づつ、印刷された版画の絵と折り紙を入れて、数を数えなおして、段ボールの封をして、郵便局へ…。暮れで大勢並んでいる窓口、「ウクライナは、今は届けられないところもありますよ。確認してください。」と地名の一覧表を手渡され、『ジトーミル』を見つけた時は、本当にうれしく思いました。「良かったですね」と、受付けてもらいました。12月27日、現地のジトーミルから「無事届きました!! 各小児病院と孤児院の子ども達に贈りましたよ。」という嬉しいEメール。皆さん、本当にありがとうございました。(小林 修)

ウクライナにメッセージを

飯原発北信濃ネットワークがカードと折り紙を送る



「ウクライナの子供たちにクリスマスカードを送りたい」という思いから、飯原発北信濃ネットワークが、今年も「ウクライナにメッセージを」を企画し、12月27日(日)に、北信濃の各小児病院と孤児院へ、クリスマスカードと折り紙を送る予定です。今年も、飯原発北信濃ネットワークが、12月27日(日)に、北信濃の各小児病院と孤児院へ、クリスマスカードと折り紙を送る予定です。今年も、飯原発北信濃ネットワークが、12月27日(日)に、北信濃の各小児病院と孤児院へ、クリスマスカードと折り紙を送る予定です。

「ウクライナの子供たちにクリスマスカードを送りたい」という思いから、飯原発北信濃ネットワークが、今年も「ウクライナにメッセージを」を企画し、12月27日(日)に、北信濃の各小児病院と孤児院へ、クリスマスカードと折り紙を送る予定です。今年も、飯原発北信濃ネットワークが、12月27日(日)に、北信濃の各小児病院と孤児院へ、クリスマスカードと折り紙を送る予定です。

「静岡サレジオ小学校」の子ども達が 車椅子2台と寄付金15万円を寄贈!!

2004年12月19日(日)午後、静岡県のサレジオ小学校のクリスマス会に、招かれました。児童の皆さんのクリスマス劇や賛美歌などは、日ごろの忙しさに疲れた私たちの心をほぐし、清めてくれるひと時でした。「ハッピーランチ」(子ども達が週一回給食の一品を我慢)で貯めた寄付金や、駅や通りでアルミ缶をせっせと拾い集めて得た貴重な寄付金が児童代表から、そして



2004.12.19 (日) 静岡サレジオ小学校

保護者会からも、災害の被災者へ寄付されました。チェルノブイリには、ずしりと重い寄付金と、今年も2台の車椅子が贈呈されました。子ども達が一年間かけて集めたお金とともに、子ども達一人ひとりのやさしい心も、現地の人びとへ伝えたいと思います。既に車椅子の贈呈者も決まり、障害者のイヴァン・P・ブルィガさん(74才)、ナロジチから移住したアリーナ・マチエンコさん(29才)とに、2月訪問団が持参します。(戸村)

特集!! 2月訪問団「草の根支援の評価」調査団の役割

評価プロジェクトチーム：戸村京子

今回のウクライナ訪問は、通常の2月訪問と、外務省・草の根無償支援「移住者村診療所の医療機器の配備」のプロジェクト評価の仕事を兼ねたものとなります。代表団・調査メンバーは、野崎泰志（日本福祉大）、戸村京子・神野美知江（チェル救運堂委員）、野崎隆人（筑波大生・自費参加）の4人です。

2月訪問団の仕事の1つ目は、前号で紹介しましたように、柴田なつみ様（岡山県）より寄付していただいた「GE 横川メディカルエッセイ大賞」の賞金を、寄付先として指定された「ジトーミル州立小児病院・小児血液科」へお届けすることです。2つ目は、2005年度の支援内容・予算などについて「ホステージ基金」と話し合い、これに付随して、ジトーミルでの「健康保険制度」について保健省や関係機関・担当者から実情を聞き、この制度利用による被災者支援の可能性について話し合うことです。さらに次年度の「草の根無償支援」申請について、チェル救サイドの意見を伝えることもあります。

プロジェクト評価調査団としては、「評価」は初めての取り組みであり、資金の約半分の助成金を『NPO アーユス』から獲得することができ、さらに外務省へも補助金申請中で、出発前の準備もいろいろあります。現在、現地では「移住者村診療所の医療機器の配備」プロジェクトについて、診療所スタッフや地区行政担当者へのアンケートを配布し、回答が集まりつつあります。「プロジェクト評価」は、プロジェクトによる効果・問題点・住民など受益者にとってのメリットや今後の課題などを、アンケート・住民への聞き取りなどによって調査し、結果を今後の活動に生かすものです。「評価」は、現地カウンターパート「ホステージ」基金と共同で行なうものです。訪問する前から、その意義・方法・実際の調査作業などについて、何度も意見交換をしながら進めています。このプロジェクトで機器の配備された診療所を、できる限り多く訪問し、実情を調査してきたいと考えています。



＜サトキ村診療所(移住者村)＞

診療所訪問！ 行ってきま〜す。

さあ！ 防寒対策は、ばっちり。訪問前の資料は整理したし、あとは荷物を…。あ〜これが、たいへんなんだなあ。しかも今回の訪問は、全日程が15日。…荷物が重い！

外務省「草の根支援事業」に申請し、27ヶ所の診療所へ配備された医療機器の確認と、その効果について評価をするために、聞き取り調査を行います。ジトーミル滞在は10日間。今回は、州立小児病院の寮に滞在します。そして、ジトーミル市を中心に、汚染地からの移住者が住んでいる地域を、6日間を使って訪問します。

2004年、年末に受け取った資料で、申請した配備希望医療機器と、実際に配備された医療機器を比較すると、「必ずしもすべてが希望通りではなかった」という結果も見られました。これらを踏まえて、配備が完了したあとの診療所の様子を視察し、また、診療所に訪れ治療を受けている住民の方達に会い、彼らの言葉を書き留めて、皆さんに報告したいと思います。（神野美知江）

第6回 医療専門家派遣事業について

2005年2月19日～3月4日（訪ウ予定）

財団法人日本医療機能評価機構 医療事故防止センター
臨床工学技士 北野 達也
社会保険久留米第一病院 臨床工学室

臨床工学技士 江成 美絵



2000年より、「21世紀の医療技術専門家派遣プロジェクト」の臨床工学技士として継続渡航し、4年前から、自立支援を目的として、一人の青年「アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏（ジトーミル州立小児病院准医師）」を高度医療専門職に位置づけるべく、人材育成プロジェクトを行なっている。今回、彼が通学した「ジトーミル技術工科大学」より、正式に講義依頼があり、「医療安全管理学」「生体機能代行装置学（生命を維持するための医療機器の構造・原理・操作等についての学問）」等、6コマの授業を行うこととなった。

また、昨年の「ジトーミル技術工科大学」での講義（概論）内容が好評であったとの噂が学外に広まり、新たに講義依頼のあった「短期大学（准医師養成）」においても、授業を行う予定である。

今後、高度医療機器及び生命を維持するための医療機器のオペレーターとしては勿論の事、それら医療機器の保守・点検を実施する、高度医療専門職の継続的育成をするため、「ジトーミル技術工科大学」において講座を設け、高度医療専門職を世に輩出し、「州立小児病院」「市立小児病院」「地区病院」等において、安全かつ有効に医療機器を使用してもらえるように、人材育成を行いたい。

これらの人材育成事業により、医療の質が向上し、小児病院に入院する重症疾患の子ども達が救われるだけでなく、その子ども達が、将来自国にて就職先を確保し、自立できるプロジェクトになることを願っている。

<第6回渡航目的>

① 高度医療専門職養成プロジェクト（継続事業）

昨年度に引き続き、現地の准医師（心電計・脳波計専門）アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏を、臨床工学技士（Clinical Engineering Technologist）として養成するため、マンツーマンで技術指導を行う。アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏が自立して、「ジトーミル技術工科大学」で後輩の育成ができるようになることが、長期的な目的である。

- ② 過去に送った医療機器・リサイクル医療機器の所在確認・稼働状況点検・修理及び消耗部品交換。
- ③ 今年度送った医療機器の設置・操作及び取扱説明（ジトーミル：「市立小児病院」「州立小児病院」）。
- ④ 呼吸療法、医療機器操作方法、新生児・幼児・小児の体位排痰法、気管支喘息重積発作対処法の指導（ジトーミル：「市立小児病院」「州立小児病院」）。
- ⑤ 「市立小児病院」等で院内講義「医用安全管理学」「呼吸療法全般（実技含む）」「内視鏡技術全般」及び医療技術移転。
- ⑥ 「ジトーミル技術工科大学」で、①「医療安全管理学」②「生体機能代行装置学」など6コマの講義。提供した実習用リサイクル医療機器の取扱説明及び実習。
- ⑦ 新たに「医療短期大学（准医師養成校）」での講義。

…具体的な医療支援活動は以上です。

現地のニーズを優先し、それに応えるべく臨機応変に対応したいと考えています。

また、次年度以降の活動のため、以下の点について、情報収集や現地各機関との話し合いを行う予定です。

- ア 各医療施設のマネジメントについて
- イ 生活習慣病（糖尿病・高血圧症・心疾患・高脂血症等）予防への取り組みについて
- ウ あらたに「ジトーミル州立成人病センター」への支援について



<ジトーミル技術工科大学にて>

絵画展 リレー 続く!!

名古屋市内の東区(まちなみ MOMO)に続き、中区(YWCA)でも、「子どもの目を見たチェルノブイリ絵画展」が開催されました。

絵を描いたのは、18歳以下の子ども達です。それなのに、「…想像力豊かな絵が並び、子ども達にとって、いまだ事故が風化していないことを印象付ける。(中略)子ども達は事故後に生まれている。身近な被災者から話を聞いたり、映像を見ているのでしょう。(2004.12.23/中日新聞朝刊)」という鮮烈な印象を受けます。

ウクライナの子どもたちが描いた絵画「子どもの目を見たチェルノブイリ」が二十四日まで、中区新栄の名古屋YWCAで絵画展



絵画展「子どもの目を見たチェルノブイリ」中区の名古屋YWCAで

<2004.12.23 中日新聞 朝刊>



私たちは、新しいことについて目を奪われがちです。しかし、放射能の被害は、今もこれからも続きます。これからも絵画展リレーが続き、この悲惨な事態が今も現実であると言うことを、より多くの人々に伝えていくことができると、願っています。「開催してみよう!」という方は、どうぞ事務局までご連絡ください。開催のお手伝いをしますよ。(美)

* * * * *

フリートーク

2004年11月から運営委員会に出席しています。

「活動の結果や成果だけでなく、そこに至るまでの過程も見ておきたい」という気持ちから、運営委員会に出席し始めました。そこで、「救援・中部」の活動の歴史の一部を垣間見たような気がし、また、やはり活動とはこういうものなのだなあ…という雰囲気も味わえたように思います。11月会議では、それ以前にあった情報のやり取りの不十分さから、意思疎通がうまくいってなかったことが原因の一因があり、それが尾を引く形での話し合いが12月にも持たれました。



充実した活動がなされてくる中で、当然のように増してきたと思われる処理すべき物事・情報量の多さから起こった問題でしょうか。会議ではいろいろな思いがぶつけられ、その中では、「案」が提示されたり、退けられたり、内容の変更があったり、合意事項が決定されたりとするわけですが、各人が限られた時間内にできる限り自分の思いを真摯に表そうとするうちに、それらの区別がごっちゃになってしまい、話し合われた内容がどの区分に属するのか人によって異なった思い込みをしてしまうために、行き違いが生じてしまうということは、ありそうなことです。ある人が、「決定されたことに対して、その変更を求める提案がなされるのは一向に構わないが、決定されたことを遂行したことに対しての非難はおかしい。」という意味のことを言われました。これは、至極当然のことで、だから会議の中では、話し合われた内容を順次整理区分しながら、議事を進めて行けばいいのですけれど、そんなにうまくいくものではないかもしれません。(桧垣 徹)

奨学生からのお便り

04 年度新規採用 教育大学

「ムイロスラーヴァ・ルキヤネンコ」さんの作文を紹介します。



記憶の道が私たちを連れて行くのは、どこに向かってでしょうか？ それは、私たちの人生が始まったところです……。

ナロジチ地区ヴェルィキ・クリシ【直訳すると、「大きなやっ（ナースチャおばあさんの家を訪問(2001.9月)）とこ」村（現在、サマショーロのナースチャおばあさんが住んでいる村）】。この村が、私の祖母と母の生まれたところです。今日、この村はおそらく歴史から消し去られており、ウクライナの地図の上ではすでに存在しないものとされている、町や村のリストに載せられているだけです。

それはどこか遠く、「立入禁止区域」の中に存在しているのです。しかし、この「ゾーン」が誰にとって「縁のない」ものなのか、尋ねた人があるのでしょうか？【注：「立入禁止」と訳した відчуження は、形容詞 чужий(他人の、無縁の)に由来する名詞で、「疎外；収用、接収」が本来の意味】そこは住民たちにとって自分たちの土地であり、彼らは自分たちの一部をそこにゆだね、その労働と愛情、伝統への限りない献身に対して、土地は豊かに報いてくれたのです。

大地が花咲く詩的な姿を見せていたのは、それが最後でした。すべての人を、不明確な将来、移住、そして静かな春の夜が待ち受けていました。

皆さんは、チェルノブイリの不幸について知りたがっておられます。でも、知ることと感ずることとは、全く別のことです。それまでの生活から引き離されてしまった人々に、聞いてみる方がいいでしょう。

私の祖母は、事故後も5年間、チェルノブイリから約40km離れたその村にいました。「いた」というのは、そこに残っていられないだろうことが、わかっていたからです。国は、人々が「自分のため、自分の健康と福祉のため」にどこかに移住することを要求し、人々は引っ越していきました。私たちが祖母の家を訪れるたびに、小さな子どもだった私は、家具がまとめられ荷造りされているのを見て、落ち着きませんでした。私はいつも、それらの家具をそれぞれの場所に戻してやりたくになりました。祖母は黙っていました。より正確に言えば、「こうしとかなきゃならないんだよ」と言い、それ以上説明をしなかったのです。年老いた人たちは、自分自身はつきりと知らないことについては、決して語ろうとしません。

世界では、生活が沸き立っています。しかしそこでは——私たちによって設定された境界の向こうでは——平和な静けさ、厳かな悲しみ、人間と宇宙の悲しみが、待っています。家々の間に木々が茂っています。かつて人家だったものを、野生の動物や鳥が守っています。唯一生活を感じさせる場所は、墓地です。墓地はいつも一年に一度、復活祭後の追善供養の週に、活気を取り戻します。生まれた土地で永遠の安らぎを得ている人たちに敬意を表するため、人々が集まってくるのです。そしてまた時折、葬列に出会うこともあります。人が無に帰する時が来れば、人の苦しい道程は、その出発点、生まれた場所に戻っていくからです。1986年以後、これがかつての住民たちに与えられた唯一の権利です。このようにして、人々は自らの「ささやかな」、具体的な死によって、自然に反した一族の、民族の死に対抗しているかのようです。そして、刺繍された布をお守りに結わえられた、名も知られぬ死者たちの新たな十字架が増えていきます。

生命の均衡は、ここでは崩れてしまい、いつそれが取り戻されるのか、誰にもわかりません。しかし、私にはわかっていることが一つあります。私は記憶することを教えられました。ですから私も、そのことを人々に教えていきます。そして人生の道は、いつか終わりに行き着くのです……。

(訳 竹内高明：原文 ウクライナ語)

昨年 12 月 26 日に発生したスマトラ沖地震による、インド洋沿岸諸国の津波被害は、すでに死者 22 万人を超え、さらに広がりつつある。死者の安らかな眠りを祈ると同時に、速やかな復興を願うばかりである。

この津波被害は、我々にとっても他人事ではない。阪神大震災や中越地震などの被害は、まだ昨日の出来事である。そして、東海地震は遠い未来のことではなく、ほぼ確実にやってくる時間の問題と考えられている。そのとき原発はどうなるのか。地震動による原発破壊については、すでに多くの議論があるので、ここでは津波による影響に限って考える。

冷却水は原発の命綱

原発は、内部で大量の熱を発生するが、電気になるのはその 3 分の 1 だけで、残る 3 分の 2 は海に捨てられている。まことにもったいない話だが、原発とは、そもそもそうした無駄なエネルギーシステムである。この 3 分の 2 の熱を海に運び出すのが、海水を利用した冷却水である。標準的な 100 万 Kw 原発を例に取れば、1 秒間に 70 トンの海水を、冷却水として取り入れている。この冷却水が止まれば、原発は過熱し、炉心が溶けたり蒸気でパイプが破断したりする大事故になる（炉心溶融）。余談だが、毎年夏になると、冷却水の取水口から大量のクラゲが進入し、パイプを詰まらせ冷却能力を落とすので、原発にとってクラゲは大敵である。

緊急停止でも発熱は止まらない

もちろん、大地震が発生すれば、原発は緊急停止することになっている。それでも、炉心の熱がすぐにはなくならないのが問題である。制御棒で炉心の核反応が止まっても、炉心にたまった大量の放射能の「崩壊熱」と呼ばれる余熱が、通常運転時の約 20% あり、これだけで炉心溶融は充分起こりうるからである。したがって、原発は運転停止してからも、炉心を冷やし続けなければならぬ宿命にある。ここが、火力発電との大きな違いで、火力発電は、燃料供給を止めればすぐに冷えてしまう。

津波で取水口が露出し取水不能に

さて、原発の命綱である冷却水（海水）の取水口は、海の中である。例えば、中部電力浜岡原発の取

水口は、海岸から 600m 沖合の、海面下 6m に設置されている。この取水塔から地下トンネルを通して、原発に冷却水が取り込まれているのである。浜岡原発の取水量は、浜岡 1 号（毎秒 30 トン）、2 号（50 トン）、3 号（80 トン）、4 号（80 トン）、最近稼働した 5 号では、なんと毎秒 92 トンもの海水が取り込まれる。合計毎秒 332 トンもの海水が、必要である。津波の際には、遠く沖合まで引き潮が起こり、この取水口が空中に露出することになる。そして取水不能となり、冷却ポンプは空回りし、先に述べた炉心溶融の危険が迫るのである。実際、中部電力は「1854 年の安政大地震くらいの地震が起これば、海面が取水口より 2.8m 低下し、4 分間は取水できなくなる」と予想し、そのための冷却水プールがあるという。この時の津波の高さは、浜岡で 6m だったと推定されている。だが、スマトラ沖の津波の高さは、10m を越えた。この規模の地震が起きれば、引き潮による取水口露出時間は、さらに長引くだろう。

海底隆起による取水トンネルなどの破壊

また、津波と海底の隆起により、取水口や取水トンネルそのものが、破壊されるおそれもある。浜岡原発は、東海地震の予想震源の真上にあるのだから。スマトラ沖地震では、海底の断層が、上下に 13m もずれを生じたのだ。取水トンネルが壊れれば、一気に土砂が配管を通じて原発に流入するだろう。予想される東海地震と、その津波による原発事故の危険性は、明らかである。早期に原発の運転を止めることこそが、最良の選択である。地震は止められないが、原発は止められるのだから。（河田）

竹内さんのウクライナ便り

前号以後のウクライナ大統領選挙の顛末は、日本のマスコミでもかなり詳細に報道されたようですので、ここで屋上屋を架することはしません。これを書いている1月20日に、ヤヌコーヴィチ陣営による選挙無効の訴えが最高裁で最終的に退けられました。本紙発行時にはすでに新大統領が誕生しているはず。大統領の指名する新首相の予想、新政府の直面する困難(ユシェンコ氏支持層の過大な期待に比べるとともに、ヤヌコーヴィチ氏に投票した人々の信頼を得る)、来年3月の最高議院選挙に向けての各政党・議員の動きなどの話題がマスコミをにぎわしています。ヤヌコーヴィチ陣営に劣らず、ユシェンコ陣営も年金や賃金等の増額を選挙公約に掲げており、その実現のためには、行政の効率と税の捕捉率を高めるのでなければ、新税の創設か税率の上昇という手段を取らざるを得ず、実業界がしわ寄せを受けるのではないかという危惧も表明されています。

1月20日付の『イズヴェスチヤ・ウクライナ版』では、保健省の医薬品販売業者との「癒着」問題が記事になっています。医療は無償という憲法上の規定が有名無実化しているとはいえ、例えば国の腫瘍対策プログラムに(1)い、毎年国庫から数億グリヴナ(1ドル=5.4グリヴナ前後)の資金が、公立病院での腫瘍の治療に用いられる医薬品の購入のため支出されています。同紙によれば、2003年、ウクライナでは安価な抗がん剤が多く登録されたにもかかわらず、保健省はそれらを国の医療機関での利用が許可されている医薬品のリストに含めませんでした。その結果、安価なものに比べ3~4倍の価格の薬品が購入されることになり、薬を利用できる患者の数は逆比例して少なくなったといえます。なぜこういうことが起こるかという、毎年保健省の行う医薬品販売業者の入札があり、その結果に従って上記のリストが作成されます。そ



<毒殺されそうになった(?)ユシェンコ新大統領>

の入札に際し、特定の業者に有利になるような条件が故意に設定され、他に比べて高い価格を提示しているにもかかわらず、この業者が選定されていた……というのです。

ところが、1月15日付の週刊紙『今週の鏡』では逆の見方が提出されています。上記の主張をしている人物は、大手の医薬品卸会社を倒産させた過去があり、現在はイスラエル国籍を取り、別の製薬会社の支店長になっている。保健省の入札に参加する条件を自分の会社が満たしていないため、現在の入札条件を変え、また邪魔な保健大臣や入札委員会委員長を失脚させようと、彼は「汚職疑惑」を創作して国家保安局と最高検察庁に訴えた……という説です。この説に従えば、保健行政に関係している一団の最高会議議員たち、科学アカデミーの学者たちなどが、彼と共謀し、クチマ政権下の汚職が関心を引いている機会を狙って、疑惑をでっち上げたということになります。

公営病院で、例えば小児白血病を治療しているセクションは、やはり年に1度保健省に申請をし、その査定によって医薬品購入費の支給を受けるそうです。その際の判定基準は、年間患者数などの数字にすぎず、治療の水準や内容などにまで配慮が充分行き届いていない、という話は、チェルノブイリ被災者のために特化した医療施設である、キエフの放射線医学センターで12月に聞いたばかりです。

この小児血液病セクションも予算では医薬品が十分に調達できず、広島「ジュノーの会」の支援を受けています。(1月20日)

事務局便り

このたび、「救援・中部」の会計に就任しました鈴木修です。

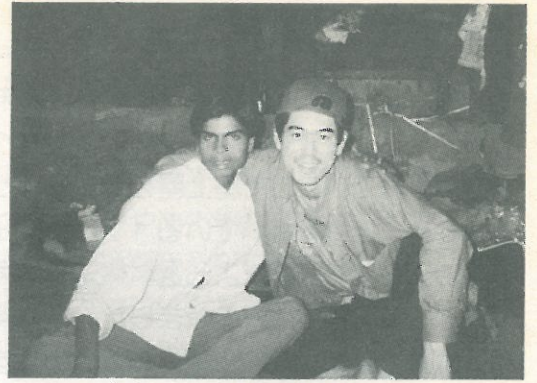
「何か人の役に立てる仕事はないか？」と思い、NGO 関係の仕事をいろいろとあたっていたところ、「救援・中部」より会計をやってみないか？との話があり、さっそく取り組ませていただいた次第です。

さて、12月の研修を経て1月に入り、業務にも慣れてきました。その中で一番印象に残るのは、皆様方からの義援金とその使い道についてです。毎日、郵便振替で皆様方から多くの義援金が寄せられます。個人の方から団体の方まで、いろんな人が「救援・中部」を支えてくれます。中には、高齢の方やご自身が障害をお持ちの方まで、ほんとうに様々な方がチェルノブイリ事故の被災者のことを思って、尊い義援金を寄付なさってくれます。この貴重なお金を管理するのが私の仕事ですが、「救援・中部」がそれをどのように使っていくのかについても、私自身も慎重に考え、活動に参加していきたいと思っています。

現在の支援は、主に医療機器を送ったり、その整備を行ったりすることに、多く使われます。私には医学の知識はありませんが、「救援・中部」のスタッフが、今回もウクライナを訪問して、医療機器の使い方を教えたり、整備したりする仕事にあたります。また、医療機器の整っていない病院などにも、資金が行くように心を配っています。ウクライナでは地方の病院に行くと、レントゲン設備すらないような病院があり、また何十年前前から使って老朽化した医療機器を使用しています。まだまだ、支援を必要とする人々は、たくさんいるのです。そんな方々のためにも、皆様の尊いご支援を、有効に活用していきたいと考えております。

皆様、「救援・中部」へのご意見や要望など、お気軽にEメールやお葉書などで意見をお寄せください。皆様のお心が遠く離れたウクライナに届くよう、これからも全力をつくして頑張っていきたいと思えます。

(鈴木)



<向かって右側が鈴木さん>

編集後記

- ☆未曾有の被害を出したスマトラ沖地震による津波被災国で、外国からの援助に対し「緊急救援は3ヶ月で終了」発言。地域紛争のために被災住民に本当の援助が届かないでは、さらに悲惨。南の国々の建て直しに、地震国日本の政府・NGOしても、息長い支援が必要だ。(京)
- ☆申請書作成で、慌しく年の瀬と新年を乗り越えた。あっと言う間に如月。情報によると「平年はマイナス10℃が普通」という、ウクライナで過ごす。自己責任で防寒対策を工夫する。(美)
- ☆先日、仕事でトラブル発生。そのとき組織において大切なことは、判断力以上に、チームワークと思いやりということを再認識した。解決後は達成感と爽快感を味わえた。(佳)
- ☆1月18日、日本国内で53基目の原発(浜岡原発5号機)が、営業運転を開始した。中電は、「この原発は、耐震性や作業員の被曝を防ぐ工夫がしてある、最新鋭の改良型だ」と胸をはる。ならば、3・4号機は？ 1・2号機は?? 現在の耐震基準に対しては、絶対合格しない欠陥原発が、東海大地震の危険地帯の真ん中に、居座っている。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473